

新潟方言一県民の方言理解と使用に関する一研究

青木理紗,大野華純,仲川瑞希,長谷川智美,星芙美香,倉智雅子*

新潟リハビリテーション大学医療学部リハビリテーション学科

[受付・掲載決定:2013年12月10日]

キーワード: 方言, 新潟, 語彙, 地域差, 年齢差

要旨 新潟方言の理解と使用の地域差について,新潟県在住の中学生以上を対象に中越(長岡,柏崎),下越(新潟),佐渡で実地調査した.10種類の新潟方言を含めた例文を作成し,被験者に提示した.被験者にはこれらの方言の意味を答えてもらい,同時に日常生活でも使用しているかを回答してもらった.方言の理解・使用についての大きな地域差は認められなかった.それと同時に被験者の年齢に関係なく,若年群・高齢群ともに標準語普及と方言離れが示唆された.

緒言

方言研究には,音韻・語彙・イントネーション・文法等様々な分野があるが,本研究は方言の語彙・意味・使用法の研究を目的とした.そもそも方言とは,一つの言語において使用される地域の違いが生み出す音韻・語彙・文法的な相違(地理的方言).共通語に対してある地方だけで使用される語(俚言).社会的身分・職業・性別などの要因が生み出す音韻・語彙・文法的な特徴.また,そのような特徴によって区分された同一言語の変種(社会的方言)のことを言う(広辞苑,1998).

方言の区分による境界線は様々で,東北弁・関西弁のように広い地域で区別されるものもあれば,山形弁・広島弁・鹿児島弁のように県境で区別されるものもある.さらには県内でも多くの方言区分が存在する.新潟県はまさにその代表といってもよい.新潟県を言語的区分に分けると,岩船・北蒲原系,東蒲原系(阿賀北・新潟市),中越北部系(長岡周辺・県央),中越南部系(魚沼),西越系(糸魚川),

*Corresponding author:

新潟リハビリテーション大学医療学部リハビリテーション学科

〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16

電話:0254-56-8292

FAX:0254-56-8391

E-mail:kurachi@nur.ac.jp

西端越系（上越），佐渡に大きく分けられ，使用している方言は山形弁，会津弁，群馬弁，長野弁，富山弁，能登弁，関西領域での方言，と全国の中でも同県中にここまで様々な方言があるのは珍しい。その原因として隣接県が多いこと，県域が縦に広く離島があること，大きな山脈・川などあることが挙げられる（平山・小林，2007）。本研究では数多く方言が存在する新潟県で，方言の理解と使用にどれほどの地域差が出るのかを調査した。また，それらのデータを年齢層別で比較し，新潟方言の現状についても検討を加えた。

方法

新潟県在住の中学生から高齢者までの幅広い年齢層を対象に，中越（長岡，柏崎），下越（新潟），佐渡で実地調査した。上越地方の調査は出来なかった。被験者は中越 17 名（若年群 4 名，中間群 5 名，高齢群 8 名），下越 15 名（若年群 6 名，中間群 4 名，高齢群 5 名），佐渡 4 名（若年群 1 名，中間群 1 名，高齢群 2 名）の合計 36 名とした。年齢の影響も検討するために，30 歳未満を若年群，30 歳～60 歳を中間群，60 歳以上を高齢群として 3 つの年齢層に分類した。

調査に用いた語は，上越，中越，下越，佐渡の方言として既に分類されている語の中から 10 語

を厳選した（楽しい新潟弁，2012；新潟弁辞典，2012）。それらの語を 1 語ずつ含めた例文（表 1）を 10 文作成し，被験者に提示した。被験者にはこれらの方言の意味を答えてもらい，同時に日常生活でも使用しているかを回答してもらった。なお，①・②・③は上越，④は中越，⑤・⑦・⑩は下越，⑥・⑧は佐渡，⑨は全地域で使用されていることが事前調査で分かっている（楽しい新潟弁，2012；新潟弁辞典，2012）。

結果

意味の理解は，各方言によって理解されているものから全く理解されていないものまで，大きな差が出た（図 1）。全体的には，理解しているが使用していない人が多かった。個々の語では，①・⑤・⑨は比較的どの地域でも理解されているのに対し，③・⑦はほぼ全地域で理解されていないという結果が出た。⑤と⑨は同じ意味の方言であるが，使用頻度は⑨の方が多かった。③は理解している人が被験者中にはいなかった。

表 1 調査に用いた方言と例文

①野菜が <u>いっぺ</u> こと実った。	(たくさん)
②大勢の前で派手にこけてしまって <u>しょうしい</u> 。	(恥ずかしい)
③栗ひろいどうだった？ <u>すつとんとん</u> だった。	(どっさり)
④な <u>じら</u> ね？	(ご機嫌いかが？)
⑤ <u>さーさー</u> 一家に帰りましょう。	(そろそろ)
⑥今日は <u>ぬくい</u> ですね。	(暖かい)
●失敗を <u>しびく</u> 。	(引きずる)
⑧ <u>しなしな</u> 歩く。	(ゆっくり)
⑨ <u>そろつと</u> 帰りますか？	(そろそろ)
⑩ <u>がつと</u> に押す。	(強く)

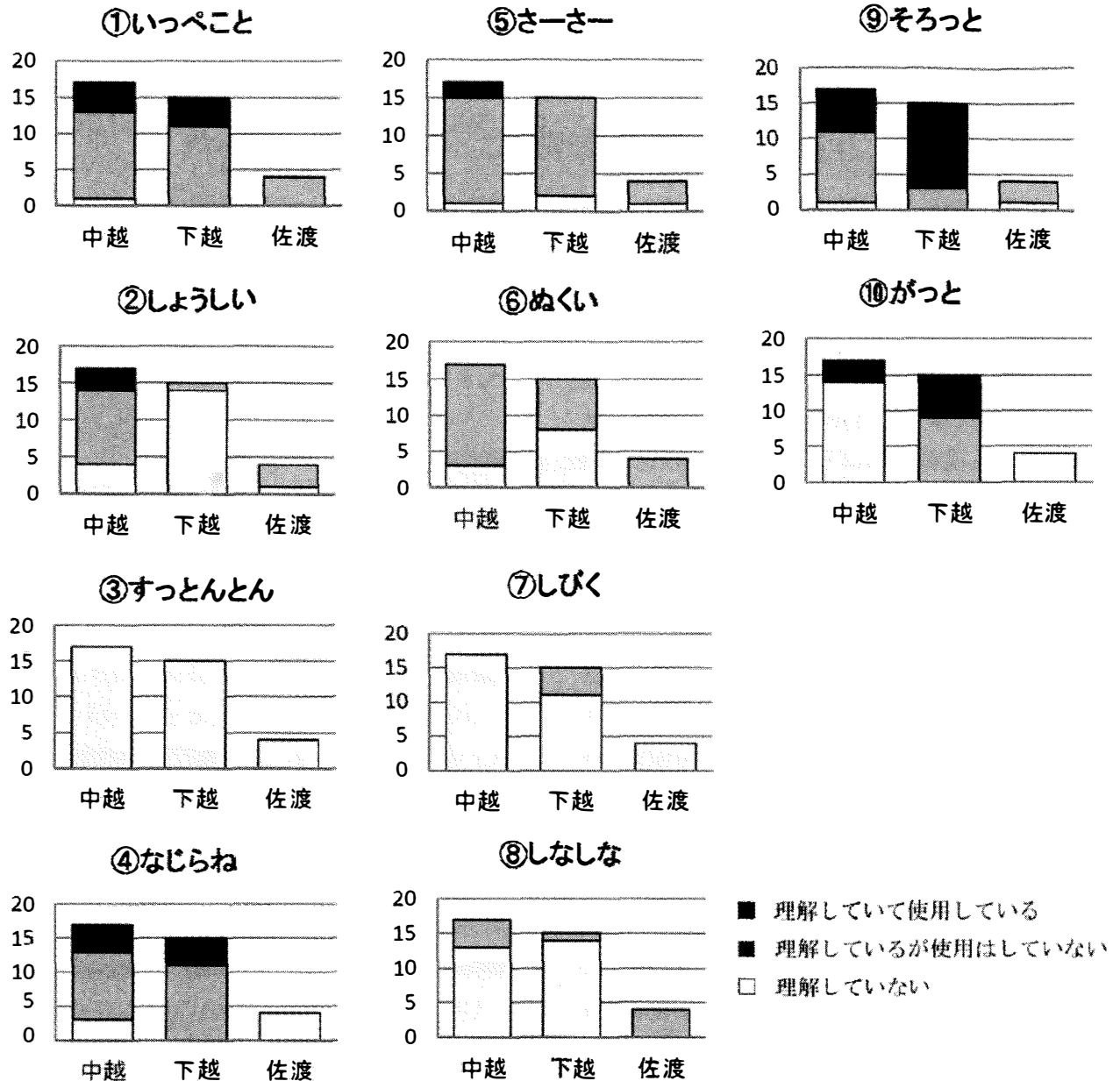


図1 調査結果

考察

本研究の結果、方言の種類によって理解と使用に大きな差が見られたが、地域別の比較では顕著な地域差は認められなかった。その理由として、実際に方言の理解と使用に地域差が失われつつあることも考えられるが、本研究に参加した被験者数が限られていたこと、地域による被験者数に

偏りがあったことが影響している可能性も否定できない。今後は、各調査地域での被験者数を増やし、今回の結果を検証する再調査が望まれる。

年齢別の比較では、若年群は高齢群に比べて方言の使用頻度は少ない結果となり、若年群における方言離れを示していると考えられた。ただし、今回の調査では、高齢群の被験者の中にも、「方言の意味が分からない」、「使用はしていない」と回

答する人が少なくはなかった。著者らは、高齢群は方言の意味をよく理解し、かつ使用する頻度が高いと予想していたので、これは意外な結果であった。

ここ数十年、テレビやソーシャルネットワークに代表される放送／通信手段の多様化や普及により、人々はより標準語（ここでは東京で使われている語とする）を見聞きするようになっていられる。日常生活で常に標準語に曝されていると、方言よりも標準語が個人の主たる言語として定着してしまうことが考えられる。近年では若年者よりも高齢者のほうがテレビの視聴時間が長いということが報告されており（齊藤, 2010）、今回の調査結果は、高齢群にもメディアの影響による標準語化が当てはまる可能性を示唆している。

今回の研究で明らかになった地域差や年齢差の欠如の背景には、人々の言語生活の変化が大きく影響していると考えられる。地域特有の方言が消滅してしまうのも時間の問題のように思える。

方言はその地域の文化そのものである。今回の研究を通し、新潟方言の現状の一端を知ることができたが、新潟県の文化を守るためにも更なる方言研究が望まれる。今回私たちが行った研究にはまだ改善の余地がある。将来的には、被験者数、被験語・文、調査対象地域、被験者の言語生活の背景等の調整を図った研究に発展させ、地域文化そのものである方言をどのように守り、次世代に伝えることができるのかを考えていきたい。

結論

新潟方言の語彙・意味・使用法の地域差について検討した。地域によって存在している言葉は

様々であるが、方言の理解・使用頻度についての大きな地域差は認められなかった。同時に若年群、高齢群ともに標準語普及と方言離れが示唆された。

謝辞

実地調査でアンケートにご協力してくださいました皆様、および本研究の評価・助言をいただいた新潟リハビリテーション大学の教職員・学生の皆様に深謝いたします。

引用文献

齋藤健作 (2010) : 高齢者とテレビ. NHK 放送文化研究所年報 2010, 211 - 240.

(2013-06-01 アクセス).

<http://www6.shizuokanet.ne.jp/kirameki/hougen/niigata.htm>

楽しい新潟弁 (2012) : 安良町交通博物館ホームページ. (2012-07-19 アクセス).

<http://niigata1116.com/niigataben.html>

新潟弁辞典 (2012) : (2012-07-19 アクセス).

<http://www2.icn.ne.jp/~sonmin/hougen/hougen.html>

新村出 (1998) : 広辞苑. 第 5 版, 2428, 岩波書店, 東京.

平山輝男, 小林隆 (2007) : 新潟県のことば. 第 2 版, 2 - 33, 明治書院, 東京.